羣書類從

百七十

和書門 類
九五九五 號
二〇四 函
四 架
六七〇 冊

内閣文庫
和書 類
九五九五 號
六七〇 冊
三四 函
一六 架

内閣文庫		
番號	和	9595
冊數	670	(230)
函號	214	39

国立公文書館
National Archives of Japan

元老院圖書記
日本政府圖書

羣書類従巻第百七十

撿挍保己一集

和歌部二十五 百首四

正治二年第二度百首和歌

題

春

霞 毎一題五首　鶯　花

夏

郭公　五月雨

秋

草苑　月　紅葉

冬

雪　氷

雑

神祇　釋教　暁　暮

山路　海邊　禁中　遊宴

公事　祝言

作者

御製 後鳥羽院　範光　雅経　具親

隆實 後改信實　家長　長明　季保

宮内卿 女房　越前 女房　神主康業 慈圓院名

詠百首和歌

御製

霞

春風のふく夜はさらにかすみ棚引くるあふ坂のやま
み山乃松風寒まに冬ちせハ花ハ春風のともみちのまと季
おほかたハ千々もやる暖に春をむかふる志のゝまの霞ら
波のうへハ霞まくる春風月ならんとかすむハすまれの春の
梅かゝハうつるともなき袖にかほりてかすむ春の夜の月

鶯

鶯乃声にそ百数ハつきせて春くる夜に鶯乃声

春くるとまつはなけし春日山さえあへぬ雪に鶯のなく
谷にのこる雪けの中ゟ出てあさよりかすむ春のうくひす
梅かえに糸をてむる霞よりこそまて色ふかくひをはゆかし
鶯の初音をまちせ春やとおもふやとそ告ぬさひさらなん

花

咲ぬるを風はなさまに桜んはなこれをさきてみん
いつしかも春さくや花さかさに風にちるなそみよしの山
櫻さく初はる根の春風に木の下乃これ雪けれゝさ
花ふれる月みよとそやみよかはにおもしろい春乃やまうせ
いつまてもちらさるかしつるまや花ちらかる春風山

郭公

時鳥しのひもあへぬ今は過ぬ五月まつまのこゑはなかなかなり
子規一声たけは宿はのかつらにあはれあはれ月
なのなかりの雲井なるに時鳥なれても山はそれともまたなる
時鳥まつ宵かたの鳴かれて雲のいつくにかなしほとる
やうらせし花橘はそれまれかしまたにかりゆく郭公か聲

五月雨

吉野川せきいるる水にまさりける波を入るる五月雨かな
このころの三か橋はるは新しふてあやめふちるさ五月雨かな
あまくまて袖も今日の浪こそかりきりまくの夜まさみたれのころ

五月雨はさや茂のやふにあふ今もこまてもかなしあへ姫さらにかくこ
あまさるやそうち川の五月雨にたすたとかふまこなる橋人

草花

うちなひきさやうかにふ秋の来て荻の風そのいする花
風ふき乱れ何処山そ女郎花のうちもさす花ひらく
秋風の吹ぬ日より志かは鴫志のひもあへとれに出るなり
旅はまつ志のはなささうきうへせよ小萩か露をさらに宿なる
大かたはおなまへし白露もささらにさこの秋のゆふ暮

月

いつかいひいかなる今さし山端にいさよふ月はなかまたるとる

何の道ハ末遠なる秋の月風にさそふ松の下陰

有明の月見ハちりの絶えぬ嶺しくすむらん影もや西乃山の端

今ハ秋山ある里にすまゐせし月みる夜に有明も影し

柞原梢もここに染め入てのこるくまなき松乃月影

紅葉

大井川あらしの山の影みえてそめし梢にみなみちそめ

うすくこく色もつゝまず時雨にてまた紅葉しは あらハ

秋の時雨岩葉の山ハそめて梢に嵐よそへるよそにみちそ

峰ふかくそめぬ梢ハあらし山時雨にふりしあとさき一枝

龍田山そむる時雨の袖やまた秋も紅葉もみの果てなし

雪

冬や来ぬうつろふ道にふる雪のなかにそ見ゆる朝の戸の空

これハ紅葉も枝なきにさえて松の雪

冬枯の遠の山かけハ雪やうつる夕の道に遠き山の雪

あやにくに時雨にそへし松の葉にふりおく雪の遠き道

さびしさに晴れせぬ朝に見えしは人の雪の遠き道

氷

冬の夜ハいたく氷る谷の河なかにむすびし山川の水

寒さゆる氷もとにこほりてむすびしあくる夜のまに

朝まだきうちとけぬるを見て今朝の氷の志賀の浦波

浮草ハ都をとめぬもとのならの谷も水ハうきてこそまさらし

ならの川風さむみかへしてありし山ヶ端つる友千鳥なれ

神祇

いまも川をわたらんしふるけき道ハあまてる神そ見ゆ志るらん

ちはやふる神やしるらんしきしまや御国ならなりの香を

玉垣や神のめぐりもまさりゆく月のかつらもおりそへ

流てまたとこしへとそふかきちかひを誓ふしる道ゆかし

ちはやふる庭火たく神のかゝる榊の葉も色かはらぬ

釈教付

花厳

かゝる朝日山の嶺ふもとにつゞく谷の埋木

あまりにもあかぬせさせ萩花の露もまさる無漏の縁

阿含

さしをくも入道の山あまたつるにハやかてさらにわ見ゆ

方等

般若

池さよみ水にうつる月影やむかしをみるためしなりらん

法花

もゝ降る草木もなりのまゝ一味ハ雨のたるゝそよ八

暁

神渡山路と流るゝ錦ハ嵐にあらそふ紅葉ハまへの風
秋の月ハ野のそまさる苔のけしきをみよしのゝ山のたちの花は
くもらぬ光ハ月影にはるくまなき月の光
秋の夜の月ハ影きよく横雲の峯をてらし明ゆく横雲の空
雲ハ霧のかりの雁かねくれなゐに山のはちる紅葉の有明の月

暮

三日月の影ほのかに暮れ山端ハ霧のかゝりし有明の空
大井川かせさむき秋の色見えていさよふ波の夕くれ迄の空を
山風に稽古の紫つきそそく色見えし枝の夕時雨の
山端をかゝる時雨の雲まよふ浦の夕月夜

帰るさをたてる道時雨の花かに花もや人のみよし野の里

山路

若葉ハ霧の中に露さて月ハ山しろの山やまの
紫をかけみる雲まよひ秋の夜の月影をかたむる里の山
秋の月くまなき空ハとまらせし雲のやまかさる山の中山
霧のかしらハ秋の実の葉の月影さよふ紅葉の中や
吉田山の尾上つゞきて末の松山まつ島の浦の

海辺

霧の立迄ハあかしの浦の夕暮かなしきあまの釣舟
月さえて明石の浦の波の上にみえつる淡路島の雲

猿小舟引来も志らぬ波路にハいつまでしてゆくらん
磯の松嵐にさへ絶行もなほあま遠きちとせ波の花こそ
あれけれ浦吹風に雲きえて波よりいつる有明の月

禁中

春ハ来て新嶋の花をながめて都路に寺ハして雲の上人に
うすかすみ夏あさき此木間より春をとむる藤壺の藤
九重の花の紀なかの八重の八重に花を波もかさゝき小宮
ともすかし雲井の庭を照らす御士の代々ハ玉路のこゝろ
くもりなき雲井の月よやとる人ハうしろつまに秋も都の宮

遊宴

千代の春君か為出る鶯なれや門松をそふて二葉なる雲
井にあかる宿なる泉のなかさえて夏も夜ならぬ枕をそむける
秋の夜な月よそうたふ舟なかち波の上人ありうつしめの花
雪の夜の紀霰津の京なる雪うさハあまたる袖もしらぬ人の袖
花の宿や大和ことなる楽調をはし人のこゝろをとすこえける

公事

雲なる人ありて雲井の志ふれる袖をつらねて花の人
相坂の山こちら出て雲にかけるしのかる月の駒
天津風雲井の花を吹こして乙女か袖をやとる月の音
諸人のみつかし門あるかひ雲井にいる河の音

すゑのよまて世の御乃なをとゝめしむまもりのかみち

祝言

二上山出る朝日の光よりのとかなるへきよろ川代乃春

春くまてはしるしにまさる住吉の松やちとせのなかくあらなん

ちはやふる神もまもらん君か世はむかしにおさまれる万代乃あと

亀の尾の岩根をおつる白玉の数さゝるかきさ千代の行末

しろ田やかけて千年のためし地のかいのちなき川　下

一寿あるとふなりも

冬日陪　太上皇仙洞應　製和歌百首

従四位上守大蔵卿兼行春宮亮丹後守臣藤原朝臣範光上

霞

越しくる春はすきにしとしもたかに霞む梢あふさかの関

桜咲けはかねてそ桜けふは霞むかたもおのつからなるらむ

朝日さす春日の山にかすみして万代祝ふことのすゑさかけ

霞むかな月のかつらは今もなほはるかに君かくるめならん

海原や霞の末は忠やなみのかよひしつかなるらむ

鶯

百千鳥そなかは君か万代のはしめや春を数へてあそひける

流るゝを花とやみえんするす出て見まさありしと谷の鶯

初音を八重にかせよ鶯もまさ姫君とや如くことなれん

春なれば梅と花ことなく春の月ゆくらかなりしひすれば恋

鶯なきてハさらせハ梅が木ふ末つてひちゝんと花をみましや

花

みよし野山のひよりみえつるハ雲ハあらて桜なりけり

春さ川そうし花もえそく見る露は花の色見え之ける

世の中に絶て花はにほひ春ハて物思ひなき花の下かげ

花ゆへ人は嬉しからめ春風に匂ひを送る色をちらして

椿なる色をうつしてうつしみん花さそふ風如そかなといの花哉

郭公

一声ハさこそつれなき時鳥雲のいつくに本まさ声のなるらん

時鳥ここそ鳴き人をまたせん一声ほのかなる音をきゝてぞ

郭公まちとまちて一声に明ぬるよとぞ聞たりし

子規なつかしき声の暁を八声の鳥と打もそまつり

とまちまてしてぞ旅人のみ山の時鳥かへり姫声しぬるしさ哉

五月雨

五月雨ハ小止の空やあは志ろし雲きまへしおちる軒の玉水

日かそひて今をさかゆ道ハ五月雨にふる橋名のことの

五月雨降しまもみえ晴もちのころありすくるしあら月哉

五月雨にハ風のやの物よりかゝるハこまやかになるの糸
ふるまゝにまゝ見るへみゝのことまゝならすゝをおりてよるへし

草花

物まて程にくる袂に白露しかくのおかの萩すゝき花すゝき
手枕の野へにおきこほる女郎花なよひてあるしなさけやまなれ
物まてこぬものゝ花なりと萩につゆをおきそへる露は白玉
前襟さてみる人のあはれハとそふたつのむらなかめ秋の野一むらに
朝日影も我としも見ゆる尾花か末のさゝけにれいく

月

月のかけ物もとも哀すまひ秋よりかゝる物かくすゝ物

いるをとらゝみいつるを山と歌ても言ならみ人こそ月は歌には
秋ハくるゝ月ハ夏ひとりのくに物思ふ人さあはれとこそ覚
夏にくらまおちにるかくは物ぬよりなをさかりゆくよなれは月歌
かくそかゝりさやけき月をいさつよにながめすくハいあまん物なれ

紅葉

秋霧は龍田の山なみちして嵐の末そあらしこさそ歌
うみち葉をそむる時雨の後まゝ色に見えそめる夕附日に
紅葉ちる志賀の山の中吹くれてよする秋のさゝ波
をくら山のみち葉ちまゐハ林にハ名にある雨そくく
庭の紅葉をたゝぬるをそんあはれ人にこそやまとの里

雪

浮くもむこは風のさそひして初雪ふれしいつはなさそふらん

空ハ花庭ハ月かとまかひつゝ春と秋とをみする志ら雪

水は面にちる志ら雪はけみえて底よりもふる心地こそすれ

松さへ川志まも白妙になる雪はさなからきえて地渡そいつくらはやまふ

白雪のふりての年はなりつゝいつてける身の果そ悲しき

氷

秋の手向も紅葉は色やかはらんてかつにほふる山川のこ川

芦鴨のなくさとひまなくなりけつゝ玉かとみゆるうす氷かな

よもすからさえまさるらしさゝ浪は水の袖や小霜をこえ

こや池の芦は玉葉に霜さえて水をなかるゝむこの浦のせ

池水の水ハ月はみまそてくもるとみゆるあしのまよかち

神祇

神風ものとけき春はめくみそふ民のまもるいせのそま萩

皇乃御まもりさらにいそかさるはめハ夏もせとしからん

見えも山の秋に紅葉のまよ風もなるゝ秋乃ゆふ暮

春日山その名はいふて帰る雪を神垣くみのはるそみる

末は世に示まつ昔はなをけてそこなは山の君まもる神

釈教

方便品　若人散乱心乃至以一花

みなもちる心之くもにこほれてそ見しとくとく法そ嬉しき

安樂行品　若於夢中　但見妙事

夏衣のみしかくもねし夢なれと妙なることをみれはうれし

壽量品　常在靈鷲山

望月のくまなきかけをみるからに鷲の高ねやまとをおもひこそやれ

普門品　弘誓深如海

よろつ河みの海よりもふかき誓ひを頼む身ハとこるおもひつゝあらなる

提婆品　經於千歳

千年まてくみて菜摘み妙なる法をえてこそハ君もつかへけるらん

曉

夏さむき松ふく風の音ふけて露のもとくるやまちるらん

夏草のしけりそめ妙に花もなく暁つくるしきの袖ぬらしき

うらやまし光ちくやなのむらこそこの月のよしの山里

香妙にハ志るし枕をかはしやまく衣ふすまに香るかをるらん

氣なる心をしつめかなのめのなきにこそハもゆる窓の火

暮

みかく日もとハてまつ夕暮く日影にかゝやく花乃いろく

山人のつえにつま木をよせて谷かけ多せすむまえなき

かへるさのよるへの山風に月まつ方とみ村雲のそら

ちるふちのなみの行かたにまきれて霞みあふそに香る入るらん

松かつらくるゝは入日かけまても山かけふかみやあはさるらん

山路

今日人をいひてはみえぬ山路にはたゝ白雲ちるとまつ家は

時なるたつねしまてはこの山への夏木たちそすくしかりけり

今まてかるかけ木の紫吹とけゆくこまかけにみなれし岩かけ

帰り清めは岩かけにうつしまても岩かけくくこそ原かけ駒

源氏乃訓こさも旅はかくもなくは若かなと思まてなかりけん

海邊

冬ふ春にかるとかしをなかむまては川しかすむ奥津に波

かくら火とみまては難波の浦風にまかれて芦まかせ葉なりぬる

旁かくすまか浦風吹かえ月も波まにあらは明乃うち

みちかくや東風山かこえてみなりてゆく霞の志らす波

あまかりしまてそみるかとれのまほしいるとなくさらの里かまて

禁中

名にかさう九重の内山かむさかる風も吹けくみるそ嬉しき

むすひしかとむかしかさらはなかみるみて夏はますくまてにかる

雲かよふの玉かけてなかけちらく月そやとれしめさてそ立ける

さゆる夜はしもかさつこ夏さめてうしこゑてさなく暁乃こゑ

松のこえもみなるかたをとくなをけくかしやうこれそのいる

遊宴

心ち桜のさく花のあつてうたのむしろになをしくハ
松の緑の色深きにまさりて千年のけをむすひつゝ
白菊をおそうつろさうにも我の名をそまうつろひは
なる宝ハなくやとまりて名ひかる猿のかけもおもまさる人
々の君はこの御よかにひらけくらの御ありたる万代の御

公事

いつしかにとくろ歩をそしやかにしてまつの立春の二川
とほるのハあとハいつとあやめ草やさそてなる九重の都
さかりの空月も錦むかへてやさしくみなる御ことほけ
はてなく桜ハさそのしと見ておなしくあそさらく松ハやへ猶をと

つきことは我か世の春を祝ひぬる門出ぬることもとのもと松かえの色

祝言

我君は千代のはしめとこそかはるのとけくみゆる春は明ゆくの
なをまさる千代にこそひさしきにつれかくめくるまで君はひさしく
我千代としかさらぬ松は月の宿の名にて君は御代の光をのみけさ
吾君は千年をそえてのち猶こことをさそくものゝ宝を
万代まではさかりのにほふそ海はなみ立ぬ河波の
音そへて めてたし

冬日詠百首應 製和歌

従五位上行侍従臣藤原朝臣雅経上

霞

あらたまの春はみそらにあらはれて霞そめつる明ほのゝそら

春はなを残る夜の明もえあけやらぬ霞にこもる横雲のやま

風の音も春はかすみのみなと江に波路はるかにかすみわたりて

霞ゆくまにまにこえて雨のあしもさひしきはるのしほ浦波

まつ見るく春はきにける来るは去年の霞にかへる春風そふく

鶯

鶯の谷のとひらく(ゆ)のあとは春くるかたの雲のなかそ

春はこそまつさく梅かえにやとゝひそめつるうくひすの声

初音より名残をおしむ鶯はやそちへつる春のやまさと

いまよいは月影すめる明ほのゝ梅の匂ひもうくひすの声

古巣たつ谷のとも春はきて霞をといてなくうくひすの声

花

こゝろまて月にあまりてうちはへて外山の松にかゝる白雲

なかめても猶あかなくに花は雲のいろ霞にまかひて人は雲の花のさかりを

よしの山花の梢の色香かはる春のさかりをみる山風

吉野川ゆく瀬の花も霞ちる風にまかする花の白波

何ことも(?)いはなく人にさそはれて花に(?)あそふ雲のかけかな

郭公

卯花は垣根よりこそ郭公まちりそむる恵の日数の程
時鳥待夕暮に合ひこそ我の花なる影のこゑ
初音こそいふにめつらしかりさきのなき声ちゝしるよしは有
まちてまちし声は物にこそ時鳥たまちえつるよそは待つ恵
いつもあはれにこそ待まても時鳥きゝつのこゑるこそなり月のかへ

五月雨

晴すさまし五月の月影に物を思ひては五月雨はれ
おのれやる伊勢の山は花の雲はいへなきぬ五月雨はれ
五月雨はたゝは水にてこそ波のさかえいそはりこそ

五月雨はてつらしいさしはれても雲は軒ばの山のはの庵
我袖に昔はこえし橘の花ちる里はさみたれまれにかほる

草花

袖の人ふくしほまる色やそまりぬおりはやつさし秋萩秋の色
昭人は福や草紫はさたは枕にて露にのみ女郎花ちる女郎花
萩原や風まつ尾上にて萩の露をとまれはこかた女郎花ちる
花すゝきおきそて秋とまちゐて思のひ花とはかれこそや
ま袖も露ちる葛にこそへいふて秋風の声はしら

月

秋よりてゆく人はや花も葉ぞもなかめまちはやまはての月

むら雲にまよひなからも面影は秋の月とはちらさしきをと
なかめやる軒端の松の露ならて袖にみえぬる秋の月哉
我のみとひとり行まゝ袖の露月やいつこに秋のよさむ
月の影かくろふをまつやおそき秋もいてゝ夜の嵐の宿

紅葉

そむるよりいろやつらん立田姫あらしにさそふ秋の梢り
時雨ゆく雲の梢やうすくも色こく杜の下草
うつりゆく秋の山風はけしきにちりまよふハ松風の声
秋をなをまたへも松の下紅葉ちらすそめ色をみせける
宿ちかき紅葉の色をみよや山里は秋の名残

雪

またゝくも嵐にさそふ村雲はふるともまよふハ神無月の空
さそふにハ吹過時の木葉よりもなを時雨にそ山の松
梢にて降る時雨にけさハみえぬハ遠き嵐のかに
浦千鳥なく声ハ梢のさむしこまでもまて夜もむら雲の夏影
ふり積る人をこせてこ雪ふかき山杉の梢乃雪は下折まて

氷

さゆる清瀧川水まさて結ひ結るかたよせる
底さえ北風に氷のうへにやとる月も見るもれしそ
寒き夜の霜の朝も波は音もむすひあへぬ浦風

はし山本柴の香におちてゝ花の滝ハ雪のしたをみ
山川の岩本瀧津ゆく水にさえしとハみえてきのふハ

神祇

君のためあけてやかへる天のまの岩戸のむかし人乃をも
祈清きなれるをきみをまもるまもり家の末ハ久しくさかえし
賀茂山の二葉根本からる白雲やこはれぬかゝる時代の通路
住吉の神風にかくされとけれさ入りハ嬉しき波の音せも
かけ清きもおもふ日吉の影を神道ミ光ハさらにそあけれとも

釈教五神通

天眼通

そら見てしたゝ河祇陀山のはなにかゝれる雲の色こそ道ハ

天耳通

ことさゆるおとハ松にも時雨にもさまよひのうへハ

宿住通

世ゝをへてすきこしかたを今ハ松かすみ秋のよの月影

他心通

こゝろへの心をさとる道けるものをみきけてそゝるとそ知る

神境通

そひて川かこえてゆく道ハ本路やまと白川の里乃あゆみハ

暁

ゆふつけさのうちにたちわかれてもたえぬ乞ハあけゆくのそら
いつとなく旅ゆくあなたもしられぬ程ぞ行方もなきおもひの
今ハそれたゞ名残をしたふ事ぞあハれなる袖の上の袖ぬらす
さてハ粉黛をそなへみまち緑まし志のみあけて小庭の床
あけぼのや風やむあまりのやすらひかまけらる人の花とハいふらし

暮

色そふ紅葉色ぞそのかよ通夕陽音すや夕への松のむしさそふ
かの山里ハ雲に紅山のはにいりぬる暁三日月の影
山端に月まちける松本の戸をさすや木のかげ岸の松風
ゆきくれて山ふかみ遠かたの旅枕をおもふあかつきの

武蔵野に野草やちとせさそのこかけにあなたのもしかぬ入ぬる鐘

山路

あさき秋はよの中山路やそえ月は朝の秋のくもひとへ
時雨はるくもの雲をまけくもし暁天にいる袖の月影
夜のさくらと流ん袖にむかふ流のやまぞ
嵐吹けば嵐は雲のしも露
行かふ人のすそ花来さうでゆきしまる旅人の

海辺

明石がた月ゆくかねまんてさそひさ波のうへに
旅枕袖をハゆめ浮さそそかひの波ぞ

気なりけるは浦のあまのすみかよるかくもなきは沖の釣舟
波の音松のあらしにつらなりし夢路にもいとどもさなかの壁
またしたがふ浮寝の床の枕ながらも結ぶにも涙の波この秋

禁中

百敷やたえぬためしの雲の上にてうはの空にて行末は雲居にたえずも
河竹のかはらぬ色はみどりもひさしき行末を祝ふなる
松さへまもる世のためしとやかきをさまりし君の代は海の波
雲かかる大内山となりぬるのいくよは千代のつもるなるらん
清士のかく楽しさも民の竈はいたくにぎはひて民のまつりごとも賑はさ

遊宴

すみぞめの袖よりもとをかくしそふる君がためにみ一夜のこえは
あふやさは七夕のまねびに名をとどめし天の川原の夕まぐれのそら
まちわびし袂をいかでかよわすらん人の心の色をみるの秋
御精せし野辺の境に河やそら思ひの新しみつる恋もなる
立ちかへりまたいつかえの花と見るかたの光もはるかに思ひ知る

公事

春なれやさえ霞の山のみなかみよりいとなみのさくら雲のうへ人
久かたの雲井の庭のすまひまでもあらはるる君がため
今まで千年の秋のためしもかぎりなき月の影
君の世に雲井のうちにまさりて乙女のことも月にみる

新玉の年をむかふる手なれは思ひこともゆかぬあらく

祝言

君か代は千とせの山の万代も松と竹とのためしとそ人の
いはれ行く君のよろこひは和歌の浦にも千年をかさねて田鶴も鳴る
君の代を守らんの末は雲波八千代にゆくも尽くは流れ
いく千代も松の月日はめくりきてかはらぬことよ八千代流れも
百年は千歳よあまるとも栄も君のみかけは
もと家そさかへん

詠百首應製和歌

従五位下行能登守臣源朝臣昊親上

霞

けさよりは霞の人の雲さえてみえぬほとなるけのあけやのつき
難波かたこの春を待つ難波にも霞たちのほる人もおほろ月夜よ
今もまた春やこゝにまつるむさしの霞のうちにさく花の色
山ちかくかすめる春はやまさとのかすみにのかすむあけほの
よそにみる雲は都をへたつるは霞にすくるたちもあへぬ色

鶯

きつはまつこゆるさと梅の花にもなくうくひすのなく

鶯なくや流のこゑならん　えしもきけにかはきの人なく
数へとみな鶯ハいそかしき谷にハ春をよそにとくなき
梅かえに匂ひもせなき春風に心をさそふうくひすの声
花をかもせ友にハ物し鶯のなけすにえたるのつまさそよ

蛙

花さかぬ中とハかたを聞くさめて風もいとさむ嵐ならむ夜
さゝやきさけ枝てし庵の桜花たのみもあへぬ春なるさを
こ川なそくとまる花ならハみさらむ吉野春を月にまかせ
花なる人のよそも春風ようしみに袖の紐まねとその六
時しもあまたのむ花の別さへ花ちる緑のみよし野里

郭公

きゝぬまで花ハちるや時鳥人まつ山のゆふくれまちかねて忍
ひてもまつなくなかん物よハ時鳥一声とこそまちしんの
まつとあまたいつくゆらしさ郭公なきにもあらぬ東雲なれ
時鳥なかぬもまつ花一声にほまれ月ハあまの乃かそ
子規なくなきたなきえのかこてゆかしてそこの月の声

五月雨

かきくもりなかめしきなかまちていくたにかる花五月雨なれ
なかなかハ庭もしこ川に広沢の月影のかな五月雨なるら
狼川かわりゆく水まさるゆまに雲と波とおさえてまたのうち

さゝ浪や風のみたくいつみ川ひるも猶波の声ゆかし

五月雨ハ広しいとまもすゝ水もすゝまぬ波の末はるまて

草苑

植へよきまちしてそこも萩さかりなるをかねてハさそひやハせし

蛙なけそこも人のつかふ花にあそなき源草の里

むかしの錦かなその袖まれなとつゆて萩の上風声さそふなり

なかき夜ハ身をハさ成人庭の面の尾花かもとに松虫の声

生ひ人のまとゐの庭の花すゝき志かまねくさ秋のおもかけ

月

なかめすとも数なしし人ハなかきよそ月はしかなき面影そなき

なかめこしつんや今ハそれかかしくまなきよもと月そしるかる

雲もなく嵐に秋の夜さしてて月か千里に衣うつ河なき

里よりの夜秋ハ心もしるきにさて月影ハ姨捨のやま

あくかれきさえそてもまちいつるにハ月のまそてやしつらん

紅葉

西新玉庭の植も立田山さこそかへる秋のかたみはるよ

時雨する花紅葉の葉(にハイ)さそ(柱イ)うつりけるよも植ハ在の色もうく

ちりぬまとなのあかし人もまつくまなる花にはみちのあかりひハ

龍田川まちきしたえぬ錦なかちらし植の色やまさるらん

本かえちりしつくまちさを山路のかけけり行末ハ風にまかせて

雪

妹まけ妃雪より池の絶えめて見えてさ庭のおもひ
嵐つくさ椎にふりくら清ゆまそ雪よりも下なる竹のつゆもひち
ひけるんとたのめ妃麻もよくよるに竹ぬすやの雪なる夕暮
こほる池の芦竹まうつむ雪に降りちにふつしひあまたんとなきの波寄
会ふさそぬあまなれやまもかさ浦なるのむ木浪の松のゆきさおまた

氷

芦鴨のうき寝もかりそえ久にふる月にも氷し廣沢の池
木枯ち里かけものみも浅くやめて音さへのこる庭の落葉風
大井川みきそて風にさえ浴ふるおせこそ浪の音をのこして
霜もまよふ峯の嵐をとさえて肘ぬ積もる谷の氷
音絶えてこほる岩まの水のまたそ嫁るその山かけ

神祇

やよふくる光もいつみくのふるてるに山まよりけそあらしくて
百代もすめるさかけは神風やいすゞ川のあさ明き月
みゆきする松もつうりせてこくまの浦の濱ゆふ千代にやまよ
今そこる君の御代をと住吉の神さひよろる松のうらを
石清水流れは絶えのいさしへのりはここにゆく方のまたまし

釈教　五蘊

色

秋ゆく人に風すさふかゆいかさへきもなくさへさをみかまる人なき

憂

身にあまる数にたゆたふのよりありさ之ハゆかゆかねもひ人なき

想

今そ志るのこる手向き西郭に人の月のすまんゆく未な

行

去ハ風秋ハ時雨とうしみさそて走をおもひと見ゆ

識

走申なにかすむ法は走申ると思りと海に志つむんを

暮

あさちかハまつ二衣ををねかあかきかさよそ月を袖よま河に

たのむりをまちしおもひやかのうらのみなる入おね嶺

旅人の宿とらすへきたのむへうそ覚なる嫁たうりを

いとまつあやうくさなかか旅おゆうり郭は露のあるまし

独さゆる谷おいおりハをねつる様のはえる為乃一声

暁

行末はちぎるも尽ぬまくてハまつく山はてにあるさ明の月

むさり様ねをよ旅は秘まもおもひはぬりて袖のう人ふか

いかくもいとりや思ふおとさわる伏見は里の鴫ねをさき

一樹さ影あかりよつる様見えすかいつもとをそおもひそれ

あかれの袖みえてむすぶ山端に月はかゝりをとゝめてみゆるかな

山路

行末ハ松の嵐に吹まよふ峯よりみねの月をみるかな
雲かゝる梢やちかく成ぬらん岩うつ流の音のかよへり
なかひいるへ人にしすまふ雪の下道とゆる岩かね
ふみもすむやらまし東路のまつことけなき足のしけさ
たえてゐる絶より外に絶えなきさいてん末をとふ人ハなし

海邊

人とえぬあまの苫やのはつ秋に見し月にぬるゝ袖のかな
波風のをとさへあらく成る夜をまてとほく都のなつかし
あさかへぬ松の塩風身にしみて今かなたをおもひよそふる
あさらせぬ袖のなか道　松浦やともよせ波のむかしおもひてこそ
月ゆへハよそにも浦なくまかき　つねといふる浦の友かな

禁中

雲井さへしけきやまてハいかならん心をつくしてそ世のゆふまくれ
時鳥なくしてあまた夜のなかふかれさそふ声さへ遠かすかにきこえ
あさからぬ袖よ八重をかはすものとも人ハかわらぬおもひそめてこさ
みえ八重のいへ出て行く春の雲井ぞ月にかゝるさへもあるらし

公事

君か代をまもるらんちかひ出る世にひとつかよはぬかけらし

諸人のもちつる袖のをとさえてむしく庭の菊のかほりのよ
ひきつまて我はいさみん梓弓まゆみのさかのほそかて川はひ
星合をうけし光は雲晴て秋より外の庭のまもり火
郭まつて若も見に汲ゆる代雲井の月に影あかりしの秋
みをさするかせ清川の風さ　秘よりてとゆふ夕露焼

遊宴

大宮さ人桃の花をさかり名ひとをあしそふ波のさうつま
幼の頃よりたからおそきてあやか草ひきこて合るさこそ猿の歌やか
若より大川猿し継も大井川紅葉狩猿に折りもとあひつく
今も又あさ見ささりや折りて衣をしひもあへ姫宮をみるらん

星夕ひ雅も禄姫衣のまこと秋月のそ生れの宮

祝言

万代はあまね禄さかけの松をまてをそや松に月をさやけき
いく千代もすめるき池の蓮の秋のとけさうけのあかりせて
今そ君る君の千代をと呼てすみ河て松藤の千高将え
峯をまてつかさ松る千代もあらたまえをさしそふ松の移朱
久しうまたため住さを姫世中に若さ千人かな
和歌草らしかみ

詠百首和歌

散位隆實（俊信—）

霞

今朝よりは霞たなひく立田山すその、原もとをさかりて春
くるはさかにけさハあさ霞かゝる松の木風そよく
よものやま川もみえハ朝霞川やそれとゝめさらなる
あさみとりかすみのかけの花は月影のかすとハすまて春を霞か
こちかせに風はまことのきえ春の水かすむ岸はあかの

鶯

鶯はいつもふるすやいそくらんまた雪ふかき谷のふもとてなく
谷はいそく春にあけやたちそらんとやまはの里のうくひすは
呉竹の梅さきまてに人はまつ花かはいかさてまた鶯のこゑ
よをさむみやとる雪はいとゝ春誘はは谷の鶯は
梅は香桜は色としらせてもふるさとは今ひとの春

花

春はたゝ花さけとさかりまたあしたの春のくまさかさ
小初瀬の花さかりにまた春雲かみよしの春は都にの
みる梢の松かけも春は花さくはその花まちかね
春そとは色ひきたつるなかめても春雲とみよしのゝ山
まつそはつれさ桜とみかとものこそうつりさそ桜かな

郭公

時鳥かたらひけの声はきゝにきゝふるとも五月はなほそまつへらし

一声ハ昔語をすらむ時鳥さそふ橘の匂をそさそうなり

まちかねむ人こそあらめ時鳥まつなかなる時鳥の初音もすくなし

時鳥初音よ語りせはまたにうらしみかはまつのいろもなかりしを

そらもたそやむかへそう時鳥声をたつねすくさぬなる哉

五月雨

一 五月雨はふりしまさりて佐川やそ激しふちとなりにきて見るまし

一 流れそあしたまさぬ昔は五月雨に新なほそすくなき

いけのまた深はふかさのいは河 五月雨ハふしみかのなへらし

五月雨はをまさまといふに松原やそましまは暁の袖もぬれしあへとも

一 水は昔ハふかさぬきそよりよるよる世をみなてゆく五月雨はなる

萱蛍

秋やこまた松の雨みさらにみしかん人をも身様にうるさをなかいなく

女房哉危難らせハ夕なれちるさえ松しき人の秋風

言ゆけと白ひハさしてにかうつ袖ハ秋雨新にみやさなくも紀

まゆくとそてとまし恋をみそらしもさいふにすなきさ尾花葛城

おほ出入ま袖さらそせ袖をやかしみゆんなるとさし哉菓

月

おのもまたハ被そさゆるえ下さは月の数にあそさうせやぬく

夕暮は荻の音よりさきにまつ秋風そよくすめる月かな
かゝる道は雲もなさへさらに吉野の山もとの月かけも
松浦によせくる波の音は岩にくたけて猶も清き月の
いさよひの川瀬にひゝく夜の山風あはれなる月の月

紅葉

初時雨すきし秋をみよかし雲間よりもる根のたくひそ色付にける
龍田山まつ色ある紀楢の葉も紅葉しけれは秋の日もてりまさる
思ふ事よそに見る山風吹のこるはいくへにそめる錦なるらん
たちかへる紅葉をさそふ嵐ふきにたちぬる山枝の楢の時雨の今もて
すみちる紅葉散るをもいさ見るさそふ嵐まかせの秋の庭

雪

年の暮はゆるゝやまつさむけや難波かたさむき夜よりかゝし
秋すてはいつかは冬の松浦の波さえてあけの山さと
さみしさは秋をこそ思ひしか岩根にこほる雪も夕暮
ことなれや山路の末を見わたせは雪をやまかせてうつむらむかは
湖の浪も嵐も吉野の松は雪そ[ ]之なる

氷

今朝よりはとけし氷も嵐山さえゆく夜をいかにむすはん
夜をさむみ氷とけぬ岩間のかけひ音もたえぬる
瀧の音も今はのこらす氷りて岩根さえ冬の山さと

うき旅のおもひのすみかゆそなにとかるをれもの
たつ人る難波の若木わひし波よせ御き浦風ぞふく

神祇

我こゝろ神ハあはれと清からはいのらすとてもまもるらん
ちはやふる榊葉の川波ちるも人もゆふかけてたのみをかけぬ神まさき
春日山いくよも神ハ宮居もかけてたのむ藤の末葉をそ
世をてらす日吉の光くもらすはさしそふ君か千世ハ
君か代ハ千世にけしかもみそ海こえてうしや海にも神ならん

釈教

序品

鷲の山法の花をゆかさけて人やとる薫なん

方便品

一乗をはれきをしたみてもとひき命法ある仏の身となりぬへし

譬喩品

まよひ子の三の車にのりそむるしかけハさとりをしめや

信解品

あらしと思ひかなしてそ我心のまもなくまよひて

薬草品

法の雨ぬまあまねくうるほひて草木もともに花咲にけり

暁

雲はるゝ松か枝そよて出る月秋ハ一夜にはれゆくる空かな

ぬれてこそ秋のまさりける旅衣しくれて袖かぬれまさるらん

霧まよふ外山か末の花ならしほのほのとあけぬとみえは鴫の羽かき

草枕いまそいそく旅人の朝日さしそむる遠のそら

月さゆるあかつきかたの深き夜ハさえゆるかこのよ山こえ

暮

夕暮の花もちる嵐ハ音すさえ松に待つる日くらしの声

入日さす峯のかけはの戸は旅ね君そ人そまつらく

山人ハいそき出ぬる谷の雲へとふえよそのまの空

夕附日さしてハ霞のこまる山陰くらき大たき里

なかむれハ物さむけなる今朝の秋の梢の色そ見ゆる空

山路

かちこえの里いそ井の関をむすて小都もあかぬ志賀の山こえ

暮かけて夕露の道ハそゝ花山袖より下に松かせそふく

まけいきハ衣手さむみ暮て入てさも見えしさする秋の山こち

とつるへさえとハさす子の海に遠の庵よりほのく出ぬけさ 庭イ

白河の秋こそ旅と都人の岩根にみちよなれとも山のおくかは

海邉

和田の原ゆく道ハ波まようふ輝のハつくをと君とてさ人まるらん

志ほかるゝあまや見る清見潟波まもひ浦のみハかけつゝ

波とけそうるも流れてまよひかねと孫をわく袖のあまたぬれまよふ
志ら波のよる人ハこゝハ何ぞこそ沖ゆきかへる舟の行の舟
教こゝもに煙をさへやうつりん塩やさうゝいせのあま人

禁中

春と花くれんを折わくハいつそ雲井なる木ぞまよひ
こゝりつる声さへ深きしみハ千代もひけをとひて　匠道
松も木にかけて見よや蔦□結さ秋の稀なりけん
船まつる月日なみそなつる清精人の宮も今やさぬらん
沙米ぬかりまひさくみゆる船千代とこゆる河竹の庭

遊宴

小竹もとと小松が原に出かけりし野人こそ春をみなかり
舟に行く宮ゐなれ秋こそ月みなすとぬきつゝみなれ
精人のさうふなりに出る船をんのかつらに磨やうつみん
とみちてるうちなにもそこにみちのみあしろにむかやりん
とふちとも肥中も山まうちむすびてころやそめぬるなれそれる

公事

雲井より吹さ出る蔦の桃摘ましるるとそこととある
五月雨のゆりもとる雲井の鶴つきあさ池をさとる清水
逢坂の関路よむかふ駒なかりいそへてみゆるこる
千代ふるゝ豊の内の日影も光をそふる雲の上人

こととひに神やあはれまん積るの方なきあさくらのおと

祝言

君か代ハ八百万代の声うしろにきこえもる和歌の浦松

かゝりける岩紫なる山の岩根松いく秋もしるし千代の宮居ハ

君か代のためしはなにか河つるとも海ならぬも流さう沖津白波

君か代をいくちとせにも志らす河のちとせよりひも数多しかや

のとけしからぬなき山をいつる日ハ照らしそ雲井也

萬代共ん来年

詠百首和歌

散位源家長上

霞

万代を松の緑もかのとかすみそめぬる千代のはる哉

九川ぬさしの松もすみついくとせも二海の明あの

夕霧の入ろう波も白波にあこまよふなる沖の津る真来

八重霞嵐も末に誰田山春もあるありのゝ数の

霞まても松の鳴のとしのひか深霧の袖に春来なる

鶯

春をまちうきる深風さえてまさうちとけぬ鶯のこゑ

冬ハ枯谷の古巣を出て道をまちかぬる鶯乃声
すみなれしかこひを出て古巣よりわかれ出る鶯の声
ぬしなくて梅は花かさにかくれてぬれ道をゆくひとの声
時なる花梅よりかくも桜梅のうへ乃うくひすの情

花

咲や散花は桜をまつ風のさそひてかなしき春のやま里
花ゆへのうらみも今ハたえ果ぬ散も桜に春風そふく
吉野山花をと川なる古への散るをまつ川にて道をとまりつゝめ
宮川の花みることもみなちりて道やかよひし苑は木の本をねらふ
山桜木ならへしとよそにふくみちの花も流も風よりそちれ

郭公

子規まつよひは山のはにさそあらは月もろともや出にけるを
夏なれやまつは花月移る枝は垣ほの花の香にまつ一声
うくひすは古巣を流す詠めハ一声詠らなくなくうくひすの郎
橘の小枝をまそそ時鳥くれもやとこの宿にかゝまみの声
橘の匂ひもいまハさつき月にさそひのこさぬ子規の郎

五月雨

ふるそめてえらぬしもみし庭の道も川ことさつまを流して五月雨はれ
五月雨にぬれしはなのきの生ふさへみなもあしたにむすほゝれそ
さみたれてほしこのゆふかたを見る空せいはまさつる雲をへさはへける

あまくよいは日数とも涼しやそよまつ織はさみて通はる

五月雨に川は浜松波かけて梢よ散るまつの浦の世

草花

いとはぬ野人の小萩のささ枝とかはしける人の袖よりそなる

玉蜘蛛は小萩かゝる露に移ふ行る松かげは白

極らるゝ千種は花の色きらりんは色や窓よみゆらん

根ことにんをとむる行衛は見花の袖に秋をみせてそ結く

武蔵野の草にあかぬ女郎花妻もろともまつる心地社達

月

ちとは秋のとけさき清代の空晴て嬉しきかな袖の月新

雲こさへたまり川もおもむる月やあらしみそ娘ささ山は桜の花

秋のよは遠てる空よすむ月は見えておもくの里も見てさる

またるゝ夜やけ新八重の月に嬉るよは見えそ杉の達

よひはまの存かめ花乱さくる月をまつ花は春の空川の空

紅葉

千草みし野へとけすさみ今はとて立ひらき川きは山の松の梢

清寛山紅葉はあかくかならぬ通は松ものころ然心地そてすま達

多は西に小さし紅葉やうつる人されかなゝる池の水に影

ちかきまに松やすらんそて限に達より後の秋の色より八

色そめし時雨にのこるこやまとの桂乃梢八嵐ふけしも

雪

冬されて時雨も風にむすほゝれけさは積もる雪ふかく
山里の神や松の枝まても雪まちて惜しけさはなにとこそまた見
あさかほのえにしのたるまも志るまもなりしけさもる雪ふかるさと
志かやまの日数も今は積りまつて里はあまりも深るは波津
雪の人めもさらに深かりけむもかやとしつまとまりてん

鶴

志賀の山おろし嵐に波さえてかたよる浦や千鳥なくなり
さえしてし池のつらゝもとけぬらむさえもつる鳥の跡
大井川こほれるは清く雪積りなかに岩間と深くなるらん

滝の音はたえてゆく吉野山道の松の嵐や岩に激まる
よこは海の波もたえてふかく根も岸とさゝなみ寄る

神祇

長宗神にも絶えるとき神と君とは契りあさけする
このころはやくの末枝との紫に思ひいり人の見
万代をまもるなる年ふりて君かためや住吉の神
さかき葉和歌の浦波ちとせひて恵みも志つ玉津島姫
うきみはやそうちの人の心のまゝは君をいのるは神さんなし

釈教 五戒
不殺生戒

今よりは心のみつをさらへてまもる志るしの影をも志るまし

不偸盗戒

手折けるまことを法と思ひしま杉もなきハさのみあやしも

不婬戒

我妹子よ思ひ初めし端の年をへてかくも志らまし定まらぬ葉

不妄語戒

揺ぐ世は難波のことに託けてもよしといひあしといふなかれそ

不飲酒戒

さらりえぬ浮世の思ひをさめぬ身にかかりは情はうすまじきもの

暁

みやこ出しひもあへぬ旅衣は風につてとも聞ゆる鐘のをとゝも

朝雲は思ひもえ去りの初めに杉をとさしあまる袖の涙の雨の月

氏末かる鐘のあさけは聞ゆへまくらとめてきまさりしを

よひ風に吹かれ聞ゆる鐘の音に気は今そつきまさりにかへる

さらにまたこぬ人の面影も心持ちにあるも浮けのそら

暮

夕附日さすや岩辺は山寺の鐘に程なくうつろ三日月の影

いそやうき鐘は見れ遠く深き山のさきそむる夕まくれかな

きれても聞くまとゐする人の庵のうちに入相は鐘は音をさむる之

いかにせん月待ちもあらぬ袖も我がそらにゆふ浮く夕けり

秋のみと思ひけるを袖の雪に月の光のかよひてそある

山路

越ゆる人はやく岩路にかかりける雲より後の志賀の山越
行きみる梯の里をも過ぬるしるしとなる人のはての道とても
岩根をしるへにたとりつく若葉は小車と分く道すからたとりまて
さるからに岩はけち風にかつ分る駒ちとまるや山川の瀬
むすひ難し秋の衣さけは錦も龍田は山の夕暮かな

海辺

和歌の浦は波をとんにはまくもみてこそ千代の数ひとつとて
なかめやる方はまさよは濱辺さて新鷗かよふ沖津白波

渡小舟入る浦路の夕暮に松かせ志ほりまさりけるかな
いそ浦わに志ほれし波路にてもひとり浦の道もとむる月の影
我身を皇ゆく末も志らぬ波のうへ浮世をとふる海士の釣舟

禁中

皇城なる御そのあけほの風なひく御る雲も君をかし
こなたの朝とさに見えする萩の戸は志るまにものみえぬ雲井
いまひとのいつも人も都にて紀の面影は秋のころは津
今さらに思ひ出しぬ繪は月すむやとの中のさや
いまよりやこえそ御いまし人は婦くてひまてつる雲井はゆく

遊宴

ちらしかくて百敷人ハうち連ても千年をまつとそきこゆなる
白川の水にみゆきは絶せぬ流人ハ都のさくら狩よりも清
うけふる里桜か都の風そよきて木陰をとひぬれはをとめ
雲は花秋の千とせみちよは木の下にも合年ふるまは浦人
月をかけて起はも小逢坂のかしやせやかんと岸のまへ川をせ

公事

宮路より起は舞衣けれめてたくてもさまる雲まてうつ人
をこ衣をかさねて路はをいつかの月にかくきつる庭の逢行
雲は上のさ月の光のちかふ人にゆきてもすくしき法は矣
若菜摘て乙女の袖もゆかしとて千世はめてとよそあらし人

めてたしあまは岩戸のむかしより雲井にさえなかあちにあ

祝言

末よいかまてもまつ川の流れをのこけさ御代のさかえをそ
白川の水の清きは末をむすれとも松かえは千とせまさりませ 到く
うめのかをきく君かよはひともしみに月日やうすき光をかり
松もしも八百万代をまつ川風ハ君か代ひきをいはひてまつ之
れみまても嬉しとて志するにまさりそふ千代よ
あふ嬉しさ給

詠百首應製和歌

散位従五位下鴨縣主長明上

霞

春風のさそひもあへぬ岩垣はまつ河ねハ霞たなひく
たまほこやいかぬはるのはるがすみるけさとゝめて春めきにけり
なにはかたあしのうらはもまたもえて人もすさむ春のやまかけ
なるたきゆる萩のやけはら霞めてたえぬ煙にこゆるゝの草
山本もこめてたちこそはるかすみ春は衣の色まさるらん

鶯

なるはかまこそは行のよの梅に春めくこゑのまつうくひすのこゑ

春やとき花やおそきと鶯の梅かえにさきてなくかな
鶯は谷ふかくほりやてまたぬかけのこまるなるはさてふらてゝ
くもてもる霞をわけて谷川のみつにをしゆる鶯の声
鶯もさそひこそすれ梅の香はかせにちよるかをりあけほの袖を

花

まちえたるあさぬ梢をみるからに花はたえたる人あらそふ
谷かけの花咲は桜枝をかさして帰る花
嵐まつる花はてならす
紅の一しほそめはなす桜山路のなるはちるかしるきみ数
てまくもまくなかにれし人朝けはすて風の花の浪

郭公

たかこゝにかくとしけるも時鳥人伝てかくそこまてそきこえ
聲をのみきゝしなからにかゝる夜の夢のあはれまておもふらむ人さへ時鳥かな
こゝ迄る人もきこえぬ時鳥ことさへかりゆくあかつきの空のこゑ
夏ふかきさつきの杜に時鳥まつこの物あはれとや思ひつゝ
夕やみは空の路やくらき時鳥月をまつらむ山のはにてこゑ

五月雨

久方の天の川原のまさりにし雲さへはるゝさみたれのころ
よをこめてすむ人もなき月雲よりあまくたりさみたれのころ
あやめ草ひきかへてもさみたれにくちぬる軒のあやめそくさらん

五月雨は露ふかき小舟の舟のかけそへてうきなはひさしあふことなき
さはつくる月ぞなかくさまかぬ蛍山のさみたれのころ

草花

大かたはうつろふさかりの女郎花つゆまつほとはまたきと見るらん
雲路まけなかりせはさつきもあさかのの萩のうへの露
つゆまて袖ぬらすとも萩の花みたれてぬる人もなし
小萩原花ももちりやうつろひぬるものを秋の露のあさきにすくる
秋のくさむらのこの小萩原露さへそすきゆく花のさかりはかなし
松丸

月

夕附日山のはかくるまゝにあはれなるあさちかよふ秋の月

きゝ出ん尾上の松の枝をわけて月をとゞろゝ若かへし
武蔵野の雪のおもかげに思ひそめて千里のほかをみる月影
おもかげもちの西郭にわかれて出る月の影に有明の月

一首調

紅葉

秋のみるけしきは志ぐれゆくの〻時雨まで川までの苔の葉ぞちる
よそにみし雲のはたまでも紅葉の色をつくしける
つまごひの鹿の音のはてもなく紅葉まそこ山の秋の色はこゝろ
風はたゞ木の葉をちらしつゝ中々ちるをみるゆふべの杜
小川のたえぬやましたの森の青葉も紅葉の秋の色

雪

今朝も猶とけぬ風のさむさまでなほ降まさる雪ぞちる
ちるよりもあやなかりける冬木立紫の人の椎の雪の
まけば道は雪ふりて跡もかゝる山の雪のふるは
誠ぬべし雪の枝波の山のかげにさえん
おくさむし枝の板戸の雪さえて風にたえぬる夕暮

氷

風さゆる波の床に結ぶる氷や結ぶ枕さむき
すまのうらのくもゐの影や夜もすがら氷まさる
雪をとこそ思ひのこすにはそれにむすぶ

稀なる秋ハむへさえ久しき枕露の形なるひのつちもは
ほらてみるさやまとひのそふ身ハ軽ゆく弱ものとのさむけさ　つくまて

神祇

よもの海の波をしつめて治るまて神やさかえてあふく問答
道ある君にあふひの葵にかる神よりかくろ千代の初未
やまとなる神のこゝに世に君か代ハ葉をよまもる神のかけみ
千代といはゝいはふ神にいのるん八神のまふしく
さつらしもふらうな此世をむかしもなきとさえせ如かみも露

釈教　五戒

すかるこそ衣とおなしあへつかく寄まて寄をいうけ門へさ

ん世よたくみをかりの河をこにさうて若ハ来てさり迷
ゆきさうに法る舟ものは遠しもやとこへ八法のいさ衣之久里
玉かゝる夜ふけてもくちぬへしもやうちすくへくもかりの雲か
志□よしと□むかしかしをかなきを□君か□寄をみる

暁

ほけゆるのも外はあまるも名の夜ハ月より後よ寄つむ山のを
寄ふかきかり田露のいかに秋夜露ひとてハ志さのま稀ら紀
今ハとて吹すさむ之牧の笛の稀をハやこゑの鳥にゆるまて
松ふとちの若すらに秋ハふけて姫をうすまつハ鳥乃初む
やもとひま志るて稀まる桔の戸を開るに後志のゝめの月

暮

山かつは暇もひはたきゝにおはれて帰りをいそかんとうゆるこゝろは
賤の男の山路をいつるをそのほか木ゝにむかひてかへりして
夕やまくれのたまゆふにもなかめやる遠への松は白くもしのは
月はこそ山はかけてうちみる入日はゆらもんまろみ夕暮
雲をなかめて峯にかゝりこそこめてたつ山端のはふ

山路

夕くれは山路よりもひねまけのかゝる雲より松も流涌その音
また晴れ月にみえ来てもかりしてかなたにこ森のつゆよりひち
山路をけふもやとむまは椎の葉に旅ゆ夕暮は人もとみ夕暮

花てさゝまくる袖にたまる露やさせる人は旅の物とそ
旅はそし日数をへてなかめても思ひをこすらうつれ山こえ

海辺

夕くれは松風もむこ雁かさて浜路を過ちかは塩かま
波よくるかりやいつ暮れ陸海のかしまか浦のあま舟やかへ
なをもゆふあまは袖をこぬしやくれけよんある松かうしま
塩かまてかのあまは漁船かりてたくもはまの塩をたつる
ふくらへはあまは浜まはらさ沖津波

禁中

君そすむ千代をかさぬる九重は雲のはなのゆくすゑのさ

君か代に雲ゐまでとや百敷のあまりにちりの山となるらん
誰もみな萬世かけてちとせ見し蓬か枝ゆら月影に
すこしも花をぬらひハ新しつかれ人のこゝろ情にすむちよの秋
君か御代も雲井にけりて千歳ふると二つしもを契りひて

遊宴

さしこそハ会るをとめくり松か枝なかめをもけさみゆるうのゝ袖
さらぬさへ千代をこめたる竹の葉松の志らくにおそを掛へつる
なかき夕にかゝるてそみる君か代の長さまさまにやまとことは
箸かろきかすのあまりを袖にかけてあかぬこゝかけそとみる諸人
春は山秋の野原にあかてさめてあそるとも世は人なりるを

公事

君かこめ和田はらからたつ子よ千とせのをとみするも千代の初春
諸人の柏あふくしるあしこそ仏は春のちらしめあり名まて
年へぬる豊はの小色に乙女さひ付くゆる名ふの秋
呉竹の枝まる月は左朝に露まそとまる山ある乃そて
ぬけぬまてハ二世仏の数ありぬ大宮人の名をもこそあるる

祝言

御千代か雲井は親とまん積てや山木おさまるこそ
こと二ゐてあるなハいそしこゝろすゐ岩根のうてこゝさ世と
色々乃千入の末や長宗なる春はこやまの山花乃若葉

いかなりし恵あまねき神こゝろよろつ代やたえぬ政のうへをしるらむ
折にあふ今日の紫雲もゝ色にあらはれ永く志るしなかるらむ
ちよ世と

詠百首應製和歌

散位従五位下賀茂縣主季保上

霞

春といへは外山の峯もみとりなるうすみとりなる志からきの里
岩そゝく音も霞にこもるなりたえぬや山のまかせ
海原や志らぬ行末はちかくみえて霞る沖津志ら波
跡さつる山路の末をみわたせはいつく里こむる霞なるらん
かけとほく峯の梢をかすませて霞にきゆるあたし山人

鶯

古巣より出て山里に人まつこそやうくひすの声

さてさハ谷のおぼつかなさ古巣に帰る谷のうぐひすを
春はまた籬の竹に鳴てひさしく都よ出たる鶯乃声
匂ひある梢も鶯の声をまちそまよふに鳴く鶯の音
こゝろよりも気やまさる鶯の音をまちわびて春の声

花

咲るさくらハまづ花の咲初し宿の桜の木末をぞ見る
白雲ハいくへもこめても山桜みえ初しも花の色をかくしかねてハ
よしの山なる木の桜下にたえてたをりあとにかへる花さそふ風に
花ちりて梢もまたの数おほくハ花にかへりて松の葉の色
花のちるまでハさそふ松の葉めくる根に帰る花も嬉しきこゝろざし桜の花

子規

待てしはほのかにそれと聞く時鳥人とおもひよるおもふ
時鳥なく声さらになれぬともさこそも人に初音を聞たき
名残をハいつまでもはげまし時鳥なくやくもまに村雨のあと
子規なれ初ひも声をまちや花橘のゆかしくまつ初音
まつをこかしくうちなきて時鳥たゞ一声をきゝてまつ夜

五月雨

さみだれに入江のみぎは水まさり山の梢も見えずなりぬれ
五月雨ハ水まさりそれよりも人かよひやハわたる
ちかくとつくみえぬとこるをなかめつゝ五月雨

中〳〵に五月の夜をはなかりさる雨にしくれなかなか人をまたしきらん

一首闕

草花

風ゆるこそ知れ未を今さらせは雲ゆきなく草のゆかり

小男鹿なける野の尾花すゑなひきあまし露またなき袖かな

見けるかる露は袖に志てひとしく色こそ今そまなく白萩

見るかせは露もの〳〵ぬあさ風に秋まくは野路の萩原

秋ふかき二声待をとく人ことくまつこそへき萩なをとは

月

さりしまきは更けも夜をは雲消えて月澄みとほるあまの川風

雲は渡るかにさえて後は荒磯にて何かさめぬ月かな

なかりしとは袖にぬらしてんこそ月なかりけるのいろはそらえなき迄

すみのほる人はいつ小松原の月にかすかくは神のしるし哉

嬉しき秋は氣色たちて遠かへりさへそめぬる庭の月

紅葉

一枝をたをりて山風さそへはさそふ諸ともにさそひ今

龍田山さかれし梢の紅葉も嬉しき秋のいろかな

もみち葉の色さそふ雲は絶えゆけは緑よのこる山峰の色

色にあまる人をもみちも康かく山は嵐のもみち葉

身風志色よりは松も消えそめて秋のなこりか

雪

けぬかうへに積りまされは雪をとへていくよかさぬる雪ふか山

こゝろへの道まてみゆる降雪はへんのなかにうつる冬のを

山路まてふりしく雪にしらるゝは降雪の光さへ志らす有明の月

ゆきも日かすのみまさりて道のまよひは行の雪の下かけ

氷

ふりうつもりて雲のほかに志らぬ山路のゆきにみちなしそ

いつかとなるみかさの森の秋風の吹すさひゆく汀の氷かな

夜かりに月てらすなとやゆるかはたれはかれて山川の水

池の波むすひとえてつるみさの庭にてとまる氷の下草

松ちる浦にひまなくむすへとて志も庭の梢も迷ひ志は

吹よはる風の梢のあとの音さへきえてふるすかたは山の水

神祇

うきよまても十余河にまかさとみする日の影にいせの濱荻

石清水月に神やかやうなる秋のなかはにてきこそうつる

みあれ山いくよの雲八重ふる松はこの世にもいまあらはれん

沖津風夕月の影さへてまもるすみよしの松

さか枝をかはし山にたてそへて神代もおなし君かよはひ

釈教　子波羅蜜

布施

山風に花も紅葉もまかせてんそれも心はをしまりやはせぬ

戒

世をうみをまもりわたらんしるべとや貝ある浦にかゝる舟人

忍辱

つらさをもうちをも忍のふかきひとそ心かなのまことなりけり

精進

よみち葉にあからめなせそ志てゆきさき岩かけちの秋の山人

禅定

苔むしろ枕のとこそにたえそ心はなをもますみそめのそて

暁

鐘つる心ねをこの数なきまでやおのれあかる暁のそらのさゝ

なほともわかぬ心もなは情かゝる山人の月はゆくさと

さめん名る夜の寝床のあはれ風やなちこそ手枕なれそ

まそこさへ稲葉さやく小山田の庵の秋風に嵐ふくなり

すさみも今も末なあまりも心のあはれくあけゆくさの空

暮

み渡せはあまのまかれそかたひく夕日さしくる山の本の里

たゝなるゝ人をなくさめもてくるは気にもあはれやさしさ

思ひやる心はいつちかよふらんなかめもはてもゆくまてのそら

こまうくさ野山の末は里なれや葉も紅葉ぬるさらにかね

へこそ気をそへてすみのぼる月は門田のほなみに涼しかりけり

山路

よそにみし雲はふもとやなかるらん花のさけける春は山ふみ
ますまにも嵐をそふいかなる上に落ちさそへる秋は山識
岩ねふみ紅葉をわけゆく山人は袖よこそなれ炭のさく栄
苔まくらむすぶ袖も志ぐれし時雨にまよふ行きの山ぢ
なれもしらぬ蓑をさかりけるかさみをなかむる嵐のふる白雪

海邊

波かゝる浦はなかなか旅枕あはれなかの袖も浪のまえ
雲は波ふくふく嵐に月さえて山のはに霧かる跡の白雲

たよりまてさびしさ添ふは住まゐの玉しかり志く磯の松陰
みさごゐる岸を洗ふ磯にたちすみて波よりむなしく浦の秋風
雲まよふ沖は波間のなかめよりなかなかくらるを川端山

禁中

朝日さるかげものどけし九重は行の雲は一しも
なかなかに情をふかくさとをあをさよめに積る花はちりゆく山
大内の袖にかけて志ぐれし梅は軒端の枝に風もなし
たくひなくさひくを掛しつつ萩の花の村雨そそぐ花はあかまさ
万代をすむへきさけはみかへるのまえをくそて志るし

宴遊

かゝる岩ほにすむさへ山ふかみけやまいりつらん
桜人こゝろにかけ給ふ神のうへにやそふ給ふとぬれ給ふらん
こよひは月にちさきまへ諸人のかゝめてぬれにむすばるらん
なにとなく嵐やふく夜はおもふまもあはれとぞきくさかせつ
るふゑむやまとことぬれさくをぞさえん衣こそまくらにみえける

公事

玄冥ありて夜かゝめに祝ひ給ふまいり神の人のかゝさぞ見ぬる
諸人のかずにはなるが身ぞそれかくのこつさまにぞなる方を
ちぎりにかつも星合は数きはあまりもうのこさ数かぞそそえる
天津人祓する神の名にまゐやこもちさちまゐ雲のうへまでひち
雲井の上のぬれにかゝる夜は備へに月ぬれてありつる山ある神

祝言

君のことなかをせぬ名のうちなまは歳万代のあるしあらん
照る日はあまつ御まへの光を見て川は海にも波そのとけさ
吹風ものとけくまつる御代まではまさりつゝ松かゝの緑代
祈来ことしや君に数もとさそ千代にちよの万歳の若松
君か代は人の心もそともにいのちやしなふに
まつの緑はうつこ那

詠百首和歌

女房宮内卿

かすみ

春といへは日影もさすかたさきもりまてそ霞そめけれ

岩橋のよるは契りやたえぬらん霞にこもるかつらきの神

なかめやる塩路は果はそらに消て霞へたつる淡路しま山

人めよりかすみのいろに招くらん霞はあさ日の山のは

ゆくさきは雲をとふる夕暮霞はてとやかてなかめける

うくひす

春も猶谷は古巣はつらきまて雪るより出るうくひすの声

春やとき人もやあらんうくひすの春にさきたつ声をきかんとは

わかやとの梅はさかえや春からんうくひすの声にさそふうくひす

鶯は谷から出るこめぬ古巣のはまさに入りくるおなしこゑあま

世中をおもひすてつるすまゐまて猶らんはうくひすの声

わかな

まちわひし雪とも見ゆるかな花にさきたつ野辺の若菜は

たつねこし人もあらし春の野に猶雪のこる若菜つむらん

春の野の雪路のよるに面影やさはのさはらにつむらん

おもひ人はなかめも霞に風のつよさはまたもこえて

散はてる花にまかせて吹風にまかせそえぬ渡るなる

やまこえん

時鳥うれしさのぬ寝覚かなハさのみやなくとハ物のうきさへまし

さりともとまつ夜やいかにぬ時鳥忠しの日数へゆふつけて

郭公まつさ夜更けて雲間より声もきこえて音をさかりなる

子規さつきの空になく一声ぞ初音もかけのみて恋路の空

足曳の山時鳥いまひとこゑむかしをしのぶハ禄さめ待つらん

さみだれ

山城のすそにけむりさみだれていかなるらん五月雨の比

五月雨ふりやまぬころを思ひつみ河そひ柳のうら末まで

水そこにみなやとしぬる五月雨に浮にし波の音志のとなり

五月雨は雲井にかすむながめかな松原を山とはゆふくれのそら

五月雨のふる沢水越て岸のいと禄のこそさかりと

夏さのくれ

禊さめもち秋は萩ひとつ萩は上葉に風ふきまちそ

外山なる紅葉まではいけしくて尾花か末によする秋風

女郎花ひととおもふ川岸にすみなれぬらんいろをみゆ

そこさとよふて暮はよ秋風さえなみけさ萩の露まさりて

武蔵野やいろそれ物のやさしきそのゆかりさへ禄し

月

すみなれし宿にはいまもるひかりは手にてそ物思ひ波の月

またこぬ妹背山も月とえハ心ふかくしのはるゝの里
あさち原さのみふけてこそ人の心をみゆる秋ま乃月影
なかく見一山は高はさ雲ハ月影をみなくなをかり
数なれ纔かたなれ世にはまたも心なかきハやよ人月なき

ともみち

あしたなるこやま風にもこちしるやまさ姫めつらしきはいつらん
龍田山嵐や峯にかよふらんまつ姫なもみしさへえなき
山姫にはこ雲まつるさきちりまかふ白雲や峯のみち紫
秋霧は立田の山をこめたまつはたえまにかゝる色をみるかな
数なかよりは木の葉をさそひて嵐に松の色をそあける

ゆきさ

さえさえてこひぬ人の心まてあかすまてもある雪の明ほの
春ハ花紅葉を待こそこひしかるゆへハ見えぬ横なかりけり
なかめやる千種の秋の萩の葉のまて露ハむつ川原なる草の露
降つるに袖うちはらひてこさ行ハ夜半ハうき姫松そちりなる
みやま人やおなしるけ霞わけて袖のみさゆるかなさと松かね

こなた

うれてなきもとけ出る谷川の音ふかよふ峯の松の色
冬枯は月すむ秋半ばさえそめて新よりむすふうすこほり
をとつるゝかけむ風姫ハつらくめて夕ふけなかなそ絶えぬ山里

むすひとめて山田もせらるゝ人の袖さへこほるゝ露乃下葉
ゆく秋を結ひとむるはらはれぬ嵐やふせやさむけき

忠見

五十鈴川かはらさむさに御代とゝもにてらす神はかけをとこあける
住吉の松の志つ枝にをふる秋の風もたむけは波やかくらん
かくそさは雪さへ晴ぬは風さへさえてちらさ花は月もをさけり
三輪の山をしるは宿に杉さして幾代はふる牧の秋をせ
貴船川瀬々岩なみちるもみち葉かけそすむ夕の秋

あすかまん

あさひ山まつかける嵐の小松原にてはたちなかる谷のうれしき

やさしきいさそいえて嵐の下にみちのさゝさんぬいろそゆのしさ
法をめくる月もえぬるかし夜くもりし秋さへかさしなん
さやけかれねやみもまたなし鶯の声根にあるをうけぬ月
かくそめぬ松も松とおもへはたるも中に名こそおしけれ

あすか川王き

常ちとに秋をうめる暁の月かよふ夢ぬ
末ちえぬ後も暁かれ文武をとふる月ての春
みるまに暁月はるかに山もその月まもあるまに
さしひめは月もとめいたてまとひ袖に露そいろそとに
折からや夜半もかよふ声のなかすまぬとのをあけくまれは

国立公文書館
National Archives of Japan

ゆふくれ

はるかにかくみゆるすまひかけ影姿の中に宿をさゝめ
物思ふ人ハこえける山里に我身ひとつの秋は夕暮
こゝまてもけふさひしかりけり白川はなるゝ都よりたゝ人もなし
夕まくれこそもの(ゝ)さひしかりけれ秋は人のこゝろさはきける
さりとも又たえたる物を書つる風音も物まかる山かけの庵

やまみち

かつらやけちはてハかすかにて雲よりかゝる里はなし
いふせきたるもゝふ道方を花ゆく人ならぬ山路なりせハ
旅人のやすむさへとふなりけりさの跡をなる事なれは

楪をハなかりけり清き山路の松かすまぬ里なりとも木ならぬ
雪は流るゝ谷はたすけを忍ふかなめくるといふいさきよけちは

かいかん

み渡せハ雲よりも波ふこさ出て物白にちうこさあまはね来
とまりとていとま物を月をみハ物けるは浦の名こそ我なま
波まより松なれはすむ光のかなかめはまや　あまはいさり火
一夜こに寄はあしたを思ひ日なりまてハ舟ならぬあまはよむ宿
浜なる塩風よする波は音かこそてまさへと夜をさかる春

こんちう

昔より流絶えぬ清き河水いく万代のうけうけられん

くまもなき月は光ありみちまさてくぬ戸もいつしか名ありおひろく
うしろ河にうつる若草しをれたる袖そすさぶる人なんぞ
あはれなるまどしく夜に新しさえて月すみわたる雲はれけり橋
隅田まてせいに庭もきよく名のたりに名残けさここそみゆれ初雪はふる

あそひ

春に歩みにほひもある花の色しさうかしまるるてうたらにゐるさ城
散花風はむしまるてしかうさ志まで風まとこと春を祈りもひくる
笛は音やことは絶まへさきにるに若木をのこひ紫緑川風
行末も三ひ出来る頃おもまとやこゆきの様もめしみよしの瀧
大井川秋八重のしき紅葉まで行る月よりの三川の名を袖ら散

くし

百敷やうちも猶けりの青毛馬をいかにしちみけしきそてつ眺
こともかくるゑもきらるやのあそひは月さえをみくいるゆそ雲けり
かざしらるみさおうつしけるさあかやてさまを神をみつまめくに
色の人ねたのしきをそくら八千代さえてあやめはなしの末もそくるうに
雲はる人のをとみ松すること みあかそをすつのつまもなかなけるつ川

いはひ

行末をうち祝や月はてらはんとる月山のよろけ代のうけ
君か代八千世の松も年あえてよろこび雲はるいやかつる
よも代海をとつ神祝それてハ人なうも限りも志る改まり代の末八

国立公文書館
National Archives of Japan

君か代ハ猶さらひさしためし濱のまさこのかすハしらすとも
山路ゆく葉ハ下なるにすむハ行まもる千代まと
うれしさこそうけつれ

詠百首和歌

女房誠斎

かすみ

霞立川楫なかりや春来ん真さる冴ゆるみよしのゝさと
相坂の山こえてこそ春霞立見えそこまてたなひく
もイ
立ふとも春立ちぬる時ハやかてかすみつゝ山のはらかし
うちかすめ更行夜やすむらんたちかすむよかすみ春の夜の月
なかむれハ猶末とをき霞かなのとけき御代の春のみそらは
うくひすを
いつしかとさえまさりきハ山里に春を待つらむうくひすの声

鶯は木のまをすくる春風に今や古巣をさそひ出らん
やよひの末つ方のことは出て花も盛なれは人のうくひす
鶯は花のまよひて咲やぬ梅はちらぬものうくひすぞなく
折の梅はまさひをさそふらんさそへ先をこゆる鶯哉

さな

ハ桜のさかり花はさかりにいつれなれはいつへもかとめみよし野山
散かぬ花の枯をもしらすして春の宿をも人もとひ来る
ちるをしらん後をはしらすしてくやしくもいたつらに花にもなれ
あきもちは嵐の桜も嵐山春ととゝめやつきさんとすらん
ちらぬまとおもひ自ひに桜花の木のもとにやつす春はくらしつ

郭公

時鳥また何なれすの猿かこゑもさくあくる夜をかつかねて
子規つ猶しあらけるまつるは菊橘の木かくれ鳴なく道
なかく夜まちつるよもしも郭公んとゝくる一こゑの哉かる
こゑをまちておりもせてかたにて子規杜の梢の方ゆかる道
夏なよもなかくてまるかなく道の山時鳥こゑとまつの哉かる

さみたれ

うちしめるも花橘のかほるさ月雨の中にくもるの哉かる
五月雨は庭も見えすあかき露て池のあやめの葉も見えなくなし
君くやしま何を鶯は五月雨はなかめをつくし物まてなりける

さ引さゝ小萩を雲井をとふかりかねハなるさゝにみえぬ五月雨覚
五月雨ハふりにけをを田のあせ流てひくゝ小集めんもりまさ

くさのはな

家ふさゝまなくうし萩秋咲はなを袖のまなとさ
なやみ人の心やあさしなく家に志かすて女郎花の
秋なくの千種の花にさてめつる心やあななと思ふらん
秋風よ露やちるらん宮城野の小萩か末に靡きてあく秋家
の秋をまつ様さうさや花すゝきそてハ志をる風まちやなれん

つき

いてぬより月なるをたちよそへまた雲掃ふ嵐のまつかせ

すむ月のあまたのてらしぬ秋なるに萩かつく風を待いつにせん
たまさかん夏の月のくまなきとてまてもみるそてこゝろもうつなる
いく秋の月なる夜を集ぬれんにけみる人のおもさきのいけ
かけさえん昔なる人のゆくさまそ懐ひ志しる　蛛の山

もみち

さなふまそ青葉なりてみにものをけさ時雨に色うさぬらん
大空ゆけハ懐しくるさをまちうるにほうさ色うすき嵐なをみちハ
家にをりハ己ひまさましるみちたなく色ありとさハあせハ
秋ふうこ志くるまゝ風みちたハこ家たまなる紅葉の色覚
龍田山紅葉をとさそふ風すさて秋ハ雲井にまえるかつらの袮

ゆきさ

さらぬたに峯は冬さむし山里はみちさへたえぬけさのしら雪

浅茅生のをのにあれては霰のまもまこそ芦の下葉にはらふ音そ絶ぬ

さゝなみや志賀の浦風さゆる夜はまつふるの山ちのおもの浦みの

すみかまの煙を嶺のしるしにてたてるもしらぬ雪をのへの人

いかにせん冬もさむき山里はひとりもそこらもみえぬ雪のゆふ暮

こほり

みさえまたとけぬ波をしらて水のうへにこほりにけりな春の朝霜

こむら川芦まをわけゆく舟のこほりにはちまりにとちて

松風のいはねにこほる水のうへにみのゆふ嵐のさむけさ

さゆる夜は池のはらやむすふらん文字にこほりてそあかる

水底もこほりはてゝや冬の夜は音もきこえぬ玉川の水

しんき

五十鈴川さゝなみの音は君かため万代すめと神そちかひし

神風やいせの松はゆふしてすゝしみことそとけぬ時のまもなき

もろ人のよ君か八千代をあふひ草かけそそのむ神垣の内

雲井より日吉の神もうつりきてそのみやまに万代そへん

神代より神や植けん万代をまもるまつるきよき松村

あうらん

すまの浦のあまのいさり火さすそくゆる煙を見てはそつる

なかさきく花は香なくともやま風にさそはれ心よかりける とこそ迄
そへてんなるさはなつかしみよそはれたるまゝに八なつきあらし まで
志のひつんはなよせこそめそうさこしは紫さいはなのはし
のちはなのつみむすめなるはなよそにそなふ情もよしなかりけ迄

あら川さき

松風の音ときゝは鏡にね坂のゆふ流けるもいまやなつかしん
かさくれし綿の白雪はつもるよは庭の松かちらあくる東雲
雪ふりさされは川瀬をすさゆけは暁うけて千鳥なくなり
なまめくはなかへりてもなつかしい雪は嶋ねとかつくる香は秋の天さ
嶋めりとあらぬ名残よりゆきて雲にしやまとらふ東雲は月

ゆふへ

志川かなる山は里のかくさうなるも軒に秋くさきめて
行末は野川なきは山のをはなかる元にのんるゆふとまる
秋はくれちおく夕暮なきと袖は露やらも思ひみるよるな
夕暮は元まそふてる秋はなかくはえともいつくうちなかむ へき
すみなれし人はなをやすめるなくすその里はなかめさと

やまみち

いさゝらは大さへりなる旅衣めなれし山八くるしのほ夕暮
く川はさまのまの里なとさあしちら山賤はそて近は寒きを待らん
こまたなまや夜中も人はあなにてうつまことへしらつれ山居

袖はそく寄うち掛し月影とゝもにすさゆくさよ姨捨山
もろこしも八千里ある雲井まて光見えけんおなし月かけ
かい庵
さひしさる一夜あかのねさめして枕よすかれん秋のころをそ
塩風やあらき浜辺に宿りして枕にかゝる波の音をはかなる
奥津風吹よせ来るや田子の浦の浪はふしのさきに見ゆらん
二見潟雲吹風に雲きえて月の影こそ川志あひのしま
ふねとも猶まさりける気色かな千鳥こゑするすまの関守
こい早
九重に匂ひそむるき桜花やと吹風もちらさゝるらん

んあまやさよめし花をさかりめつ花ちやとあらしのころや川に
萩の戸はまつ咲さく人雲井には風の音なや林をとふらん
いかなるさん都ちかしとまかせん月にあまてる雲の上人
あらき風みたさなかふに見えてつ事もなみちものとさまれそみる
あるとし
皇はあまね福くめくみおはあひて万代とある糸竹の声
あ川さる霞は本山の千代せそてそひくのまことあらそひける
諸人の波よりうるさゝ川にこゑまゆのかけそさうとふ
あまりける人やむかとる諸人のかさに見ゆる君か代なから
やすらいくよ福あん花かけや若みなけらよ神をうつさ福そて

くし
諸人の聲をよろこびまして君をいはふ初音
嬉しさハ太夫人の樽かやと万代のしるしなりき
みえしかりのきさらぎめでたかりし君さかえ行る山あるゐの神
あかねの雲井にはあるかやとてあまかけしいる
皇がめぐみあまねき御代なれば色もかはらぬことの葉
いはひ
万代もすむ人さかゆる千とせや此山の名紫
今さ山松はも出る日は千年は□の光をそへて□まで
こまやてはさして此君の繁栄る今よりさして八千代にかけ

色も加はり竹のみどりも君が代に久しく人の物めでたき
君が代のながれに絶る岩根松いはひ祝ふなり
千代ひしく いさ八

詠百首和歌

實慈鎮和尚
神主康業上

霞

いつしかと春はきにけり山のはにさそはれて雲も霞もたなひきぬらん
よそに見し山桔小色のかはみえかすみそめし（むはイ）花の花さくへおもふらん（ほイ）
天原ゆふしの煙は春の色はかすみたなひくゆふへのそら
かくよりやいく霞ませなかむしんまつかは沖の舟かよふらん
あらためて春をむかへてあけかたのみなとあけゆく日よりくもらぬ

鶯

谷の戸をいてゝ花になくなる鶯のこゑはるかにも出るうくひすの
春くるは谷のとの岩まよりうち出る波に鶯のこゑ
春風の梅よりにほふ遣竹の紫末に吹かくしてひとの香
花も匂ふ春の夜はひさしかりて月は竹の一声
ころなくやく春のすそのゝむら雛にまさるやうをちこちの

苑

吉野山ゆくゆくもたつ峰の花より雲にうつりゆくなる
ときめきし志賀の都の桜花ちりかは庭をそなとゆきてみん
たつね来る人のまた山の花さかり雲とみえけるはるかなる里
みよし野の花なかりせは雲とのみしくもなかりしよ志賀雲
昔をいかにかんも今はあれたかなみ花の波こえし志賀川の里

時鳥

郭公人よりさきにまたさんあやと声し明けハいはんくも
うの花のかけにかくれて時鳥なくらんもとの梢もとさく
さくかりはうきつくもあるか時鳥たつ田の生田の森の一こゑ
時鳥まつにハ橘所ハあやめいつそかすてなくさめかさうらなゑ
新枕の宿をとふよりも時鳥かをける声して袖のぬれまさる

五月雨

富士の嶺の煙ハ雲にきこえたる清見か波の五月雨にそ
五月雨ハ川となりささふ志ても枕てなかの袖をとつく蜑人
ふさきまぬ人やまつとそふみこえしまてまつる五月雨の雲

人ハまついとひやせまし庭の池にあふきところせき五月雨のころや
水こえてみるもかひある五月雨ハあふきのしのの浪の白波

草花

秋風よふきて萩かり萩かりえん萩女郎花あふひまてやあなしぬ
故里の萩の花にさきそふくへきさそ野ふかんのとまりにぬるも
萩うえし松風によふ住吉の里に萩の夕ぐれ女郎花
小男鹿のなきまつになるまてに萩まてかる女郎花
藤袴さる人あるは所萩の色ともつちえやまさるさぬ

月

いかにせん月まつ宵とた山の端の松のあたりに鹿のなくなる

姨捨の山より出る月をみて今さらなに神の姫まどふる
嫁けゆかハ娘もあり姑かまよらしみなそそ秋のよの月
秋そらハ風も涼しまさるまゝ花さのまゝさまるのよ此月
いつまでか涼くなるも月ハみよ　秋まちえても秋そろふしさ

紅葉

色深き人のさめしや龍田山うち志くまでハ色かそるをゆく
色ふかき松ある峯もみちたつ色こそて秋の色をし之錦紅葉
みむろ山さて峯みちや畜姫袂よしむなる孫かなしん
もみちそとちりかもなるともちくまでなるを時雨ほとさそかるめかる
ちり晴る嵐の紅葉よそめまでて嵐ハ松の時雨くるゝ

雪

石上ふる飛鳥の朝かけりけそふ志ての色をさむけき
白ふそひて枕鳥かろうそうはまで通ゆく雪る佐山の松の下ませ
かよひなかまでてさこそハ飛とえとも枕雪る嫁しこゑんの山本
なかむまハ玉の山風にふる志らし旅の人よあけまで宿も見よ
沾たれて消ゆく庭風雪をみて宿をもかすむとひ志るべ

氷

我をさむみ志賀の浦波なかゐておかしは嵐をそさく
我宿ハ池なれそらよ落もこほる人めハ庭かよふまてく
廣沢の池氷なれもます月を見をみつく氷るをみん

すそ野を吹せくまで山風かな波ハ花にあらハこそあらめ
いつしか浅みどりにとけて年々ちりて春ハくもれへき

神祇

日の本ハ神の国とこそしるきいまよりよくもいのむとも春
我国をまもるハ神の神ならんなをとなへの松やことなき
姉川にて八年の法をまもるこそ神まもる神ハ跡をたれる
君も契るみのりのためにかなへてぞたうけても神にいのるらんハ
猶しくもたのむ日吉の光をハそらや山の端にかさめて

釈教

あさく行みのりのをしへつくしても君をたのみつる跡

さそひえて雨よ花をちらすかな池水ちしほのみぎはさゝ波
月影のうつれる池の心よりあさをむかしくさそらゆく水
蓮こそ泥にも山水も咲て見え佛の花ハこゝよりそゆく
たそかれのころて人をすてゝへさあみハ弥陀の声よこそ　主人連

暁

かつらきやこと山下うすむ山の端にかすみて雲ともなし春の曙の
難波かた霞もぬるき春の夜あしかたくや松雲のあけ
初瀬山も月の鐘よそ雲よ風まつけたる花あけ春の
今さらにおもひつゞけるおりめの花はなのく春の曙かな
帰る雁秋をまちむものあはれ月にかゝみる春の曙の

暮

住吉や岸の浦によする波の松風あはれなる秋乃ゆふ暮

東路や月まつしほのなかめさえさえとみる雲も秋の夕暮

松風はいつくもおなしおなしきとたか門のさえも秋の夕暮

花紅葉をなかめすくしてはそれとなくこゝろにしめし秋の夕暮

萩に簾のやよふかて夜毎に寺の鐘の秋のゆふ暮

山路

すゝか川の旅の衣をとて月に照してさよの中山

風ふけはさすか山の白波にふなとあさ越して誰かこゆらん

数もなく夕暮はつても川の山やまにまたならぬ旅の空

あくまても花の宿もいさ小すゝき露をなをかたしく志賀の山越

人あやしはかねにはこえて詠田山若のあとはさえくさえさき

海邊

いひ捨のさえもつけてる浦風に小笹路さえぬる波の音そ

かよひくる浦風さむし旅衣生田に杉の秋のまくらに

明石潟磯まくらなるかしこさむ舟に語をそおもふ

波のうへの雲の衣の海ひろくはるゝ浜路志まの

舟はたゝ小舟のさえ興津鳥風吹ものう

旅中

みよ旅にもひとりみやこの花の雲の夕暮

旅に出しそれは八橋ハ〳〵て旅を作す志さこすとみすか
蜘蛛手をよひ出るを氣なる人に萩枝の秋は白ひに
心まも望さ路を氣とみつるが大内山のけさ乃ゟ行ま
こまをみん人をんをみてへこ松を見れむるのいろ人への路

宴遊

うれはうらゝに人をよまちゝをみるあふむはつきの石にさゝるを
天川光をかけん果なき雨よそえあそふに志ら菊の花
んあるて若むもの光ゑとお描く人の情にもみちとをさく
庭は雲のこと志るふなる風は音にお為をせぬるる柳ぞ
秋はいはひのおさまる代の嬉しさハ春はあそひの鞠にあそ

千年

あけぼのる行の方をまだ夫て神のめ給を使え今達
百歳やかき菊は長生の盃ちに佛は菊をも樹をくは
松坂にしらなる春は人八月のつきて駒をむのなる
春は三八日さ咲は花にある数てかしは河瀬よ月をさやけさ
とるになる二世は佛の名はゑをいく千代まても君か御遊

祝言

春はよまひゆつると鳴鶴ハ君か千年を二ついにるや
万代の舞舞は袖をさしをとしるか遊嬉しさ世にもすむは
春やよひをけしまほ行はみのことめて今ゟさかえ君か
千年 八

日本政府圖書

君か代は限りもあらし浜椿ふたゝひ色はあらたまるとも

身のしめて君をそ祈る紀路山よろつ代ふる松の
千代のあらしに

建仁三年五月廿五日以大藏卿本書寫挍合了

右正治二年院百首以一古写挍合了

群書類從卷第百七十

国立公文書館
National Archives of Japan